

WS3-6 術後感染症の予防・早期発見を目的とした周術期抗菌薬投与方法と血液・画像検査の変遷

筑波大学 大学院人間総合科学研究科 臨床医学系外科

酒井 光昭, 石川 成美, 中村 亮太, 白井 亮, 山本 達生,
鬼塚 正孝, 榊原 謙

【目的】術後感染症は外科医にとって致命的な合併症である。感染予防の周術期管理法も変化してきた。現在、肺手術の予防的抗菌薬投与はCDCガイドラインのセファゾリン術前術中投与方法と日外会誌ガイドラインのペニシリン/第2世代セフェム術後投与方法が代表的だが、有用性の違いは明らかでない。そこで2法の術後感染予防効果をprospectiveに比較した。また術後の定時採血・画像検査が感染の早期発見に有用か検討した。【方法】2001～5年の開胸肺葉・区域切除例で、術前治療、感染合併、気管支形成例を除く154例が対象。術前術中投与82例（CDC群）、術後投与72例（JSS群）として感染発症率とその臨床像を比較した。定時検査は胸部X線をドレーン抜去まで連日、血液検査を術後1, 4, 7日に行った。【結果】抗菌薬投与総量（術前中/術後）はCDC群2.6/0g, JSS群0/9.6gだった。非感染例の術後炎症反応の推移は両群同等だった。感染発症率はCDC群12.5%（11例）、JSS群13.4%（9例）で、内訳は90%（18例）が細菌性肺炎、CDC群のみ2例に手術部位以外が原因のsepsisを認め、SSIは発生しなかった。平均発症日はCDC群術後3.6日、JSS群3.1日であった。感染例の臨床像は群間で差はないが、非感染例に比べ高齢、高喫煙指数、低1秒率、虚血性心疾患の罹患が多い、長い術前在院が認められた。肥満、糖尿病、ステロイド服用は危険因子でなかった。発見動機は自覚症状、バイタルサイン変動、画像所見で、先行する血液検査異常はなかった。【結論】上記2法の術後感染予防効果は同等である。術後投与に肺炎予防効果はないが、高齢者の術後sepsisを予防する可能性がある。早期発見には注意深い診察と画像検査が重要で、血液検査は有用でない。